

Our Mutual Friend

——テムズ川の役割について——

山 崎 勉

Charles Dickens の小説のうちの最後の完結作品である *Our Mutual Friend* には、人と人が結びつくための条件とは何か、そして、その結びつきが人として恥ずかしくないものであるためにはさらにどのような条件があるのかという問題が執拗なまでの筆致で描かれている。筋の上では John Harmon という主要な登場人物のみに与えられた呼称にも拘らず、この小説の題名として Dickens が選んだ “Our Mutual Friend” (our common friend) という言葉の重みが感ぜられるのも、その言葉が実は人と人を結びつけているものの代名詞でもあるからだと思われるのである。ある者達にとってそれは金銭あるいは社会的地位に対する欲望であり、また時にはそのような欲望に起因する他の者に対する憎しみであったりもする。しかし、またそれは相互信頼を伴った無私の愛情である時もあるのである。前者のような “Mutual Friend” を持つ者は、Pubsey and Co. の屋上の庭における Jenny Wren の言葉を借りれば、自らの邪悪な欲望を充たそうとして狭く暗い路上で叫び合い death-in-life を経験している “alive”¹⁾ な人々であり、逆に後者のような “Mutual Friend” を持っているのは、そのような欲望を捨て静寂と平穏さに感謝しながら生き、life-in-death を享受している “dead”²⁾ な人々であると言えるであろう。前者の典型的な例は、この物語のひとつの主要な筋の背後に存在した Old Harmon という塵芥を積み上げて山を作り、それを売ることによって巨大な利を得た守銭奴であり、彼は塵芥即金銭という価値観、すなわち、言うなれば dust-as-money 的価値観に支配された人間である。それに対して、金銭はそれ自体塵芥であり本質的な重要性を持たないという money-as-dust

的価値観に生きた人々の代表として Old Harmon の召使いであった Boffin 夫妻が提示されているのである。

Our Mutual Friend に対する評価には A. M. Patterson が述べているようにふたつの傾向がある⁹⁾。つまり、Dickens の性格描写の豊富さ、戯画の才等を重要視する人々にとっては *Our Mutual Friend* はもの足りないと思われるのであるが、彼の超現実主義的あるいは象徴主義的手法の先取りというものを重視する人々は、この作品の中の彼の想像力の自由奔放さを高く買うのである。私は本論においては後者の立場を取り、*Our Mutual Friend* におけるテムズ川に視点を置いて、その象徴としての意味、さらに象徴としてという以外のその役割を考察し、またそれらとこの作品の主題との関係を論じてみたいと思っている。

Dickens とテムズ川との関係は分かち難く⁹⁾、負債者監獄に入れられた家族と離れて下宿し、孤独に耐えて自活していた幼い12才の彼が労働したのはテムズ川に突き出ている靴墨工場であり⁹⁾、また成人した彼が死を連想させる夜の闇の中の暗いテムズ川、あるいはまた陽光を浴びた明るい生命力に充ちたテムズ川に引きつけられていたことは *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces* に記されている。このように Dickens を抱えたテムズ川は、彼の後期の作品のみならず初期の作品にもしばしばその顔を見せている。後期の作品の中でも *Our Mutual Friend* におけるテムズ川の重要性は、それ以前の作品におけるそれとは比較にならない程に大きなものとなっている。この物語の冒頭で日も暮れかけようとしている時に溺死体を漁って働く貪欲な二人の人間と、そのような労働に恐れを抱いているその一方の娘、そして、ひとつの溺死体というものが我々にテムズ川を舞台として提示され、しかもそれらの要素がこの物語を構成する主要なふたつの筋の動因となっていることは、そのふたつの筋がそれぞれに展開していくにも拘らず、その根底に絶えずこの冒頭の場面におけるテムズ川が存在していることを示しているのである。

Our Mutual Friend におけるテムズ川を象徴として抱えている批評家の

中で、Monroe Engel はそれが死を意味する大洋に流れ入る生とともに、再生によってもたらされその死の大洋から発する生をも意味していると考えている。私には彼の考え方が妥当であるように思われるのであるが、その当否は後の実証的な考察でもって明らかにしていきたいと思う。テムズ川の他の役割を考える時に、上述した死と再生というものが大きな重要性を持ってくる。それは destroyer としての、そして、regenerator としてのテムズ川の役割である。ここで死と呼んでいるのは溺死寸前の経験をする人の精神的な生に関してではあるが、その中には溺死という肉体的な生の死を経験する人の精神的な生のそれをも含んでいる。しかし、後者の再生は前者のそれと違って現世では存在し得ないものなのである。

テムズ川はさらにその川としての基本的な機能を発揮して、dust-as-money 的価値観の世界と money-as-dust 的価値観の世界を映し出す反映者としての役割も果たしている。

〔I〕

Our Mutual Friend の中でテムズ川にもっとも密接に関係するのが Lizzie Hexam である。彼女の父親 Jesse Hexam (通称 Gaffer) はテムズ川から引き上げた溺死体の金を漁って生きている人間であり、Lizzie は父親や弟 Charley の生活のために余儀なくその仕事を手伝わされている。Gaffer 自身はそのような職業の持つ食欲性を認めず、その死的な本質というものを認識できないのであるが、Lizzie はその食欲性に恐れおののき、常にその仕事と死とが結びついていることを意識しているのである。例えば、冒頭の場面において二人の乗った小舟の底に夕陽が射し込むと、布を巻きつけられた人体に似た底板の腐食があたかも血に染まっているかのごとくに見えるのであるが、それに気付くのが Lizzie だけであることがそれを証明している。実際、彼等の職業そして生活は死にまとりつかれているのであり、それを象徴するのが彼等の獲物である溺死体を捕えた時の彼等の小舟の動きである

と思われる。その時それは溺死体に振り回され、そして、突然にそれに引っぱられることによって震えるように揺れてしまうのである。

このような Gaffer の dust-as-money 的価値観、そして、“alive”であることによって経験する死というものの影響は当然 Lizzie に及んでおり、彼女はそのような状態にあることに対して罪悪感を持ち一人苦悩している。そのような時 Gaffer に対して殺人の疑いがかけられていることを酒場の女将から聞いた Lizzie は、その酒場の前を流れるテムズ川に自らの未来の生活を見るのである。

And as the great black river with its dreary shores was soon lost to her view in the gloom, so, she stood on the river's brink unable to see into the vast blank misery of a life suspected, ... but knowing that it lay there dim before her, stretching away to the great ocean, Death.⁶⁾

今そこに見えていた大きな黒い川が暗闇の中に消えて Lizzie の目には見えなくなっているにも拘らず、彼女の前にそれが流れていて大洋へと続いていることが分かっているように、彼女と Gaffer が経験しなければならない疑惑にさらされた惨めな生活も、彼女には見通すことが出来ないが彼女の前にぼんやりと横たわっており、死へと続いていることが彼女には分かっているのである。ここに現われた Lizzie と Gaffer の生——もっともここにおいてはその一部分ではあるが——を象徴するテムズ川はさらにその意味を広げ、他の人々とも関係することになる。

Lizzie の予感を実現するように、彼女の父親は溺死体を捕えそくなって自らテムズ川に落ち込み溺死するのであるが、地面に置かれた彼の溺死体はまさに Lizzie が恐怖をもって見たあの小舟の底の人体に似た腐食の同類と化したのである。ここで注意しなければならないのは、Dickens が Gaffer の死を“baptized unto Death”⁷⁾ という言葉で表現していることである。彼の溺死に対するこの表現には、彼のみでなく他の人物達の溺死あるいはそれに近い経

験を考える上にも意味深長なものがある。つまり、そこには罪ある者の溺死あるいはそれに近い経験の中に、そうすることによってのみ与えられる救済というものが存在することを暗示するものがあるのである⁸⁾。

さらにここで注意しなければならないのは、Gaffer の溺死による洗礼と同時に彼の罪の影を負った Lizzie もまた一種の死を経験することである。すなわち彼女は Jenny Wren の言葉を借りれば“alive”であった生活から“dead”である生活へと移行するのである。といっても、もともと彼女の家族に対する態度には献身的な要素が多く見受けられ、“alive”であった面においても、それは生活に強いられたものであったのであるから、彼女が生活全体において“dead”となることはそれ程困難なことではないのである。このように彼女が精神的に死する、すなわち、滅私の状態に入るのは過去の職業の罪を贖うために他ならないのであるが、この贖罪の可能性も“baptized unto Death”という言葉に示されていると思われる。つまり、程度の差こそあれ Gaffer とともに同じ罪を負った Lizzie にとっても、“baptized unto Death”という彼の死の在り方は精神的に真であると思われるのである。Lizzie は精神的に死することによってあの死を象徴した大洋へ入ることになったのであるが、同時に彼女はその死により与えられる新しい生、すなわち、life-in-death を象徴する川を上り始めるのである。彼女が新しい生の川を上るということは比喩的な次元におけるだけでなく、彼女は実際に過去の贖罪をしながらテムズ川の上流へとその住居を変えているのである。Lizzie が家族と暮らしていたのはロンドン塔よりも東側のテムズ川の河岸であり、父親の死後彼女は以前よりも上流の Westminster Bridge から Millbank へ向かう途中にある Jenny Wren の家で間借りし、そして、さらに彼女は上流地方、すなわち、Oxfordshire の境界地方を流れるテムズ川の河畔に移ることになるのである。

Lizzie の過去の贖罪はまずかつて彼女の父親の犠牲となった老人の孫娘であり、酔いどれの父親を持ち、しかも、不自由な身体にも拘らず人形の衣装作りをして生計を立てている Jenny Wren への援助ということで始まる。

Lizzie は Jenny の夢現に現われ、彼女の傷ついた心を慰めていた妖精の子供達の具現された存在として献身的に彼女を励まし、彼女に強い信頼感を与えるのである。贖罪の行為をしている Lizzie の所へ、彼女に教育を受けさせてもらった結果、今は教師となっている弟 Charley が訪れ、過去は過去として葬り去って、テムズ川に近いその場所を去るようと彼女に忠告するのであるが、彼女はそれを断り、彼女が未だにテムズ川の傍に住んでいるのは自分自身の意志からではないと答えるのである。彼女は、Charley の言葉を借りれば、テムズ川へと「引き寄せられているとか追いやられている」〔“drawn or driven”〕⁹⁾のである。このようにテムズ川は Gaffer を溺死させることによって Lizzie に完全なる精神的な死をもたらしたのであるが、ここにおいてはテムズ川はさらにその新しい生を享受する彼女をしてその道より逸脱させないようにと守護する protector、ないしは、その新しい生の preserver としても働いていることが示されているのである。

protector あるいは preserver としてのテムズ川と微妙に関係しているのが Jenny Wren の豊かな金髪である。黄金の流れ¹⁰⁾に喩えられるその髪は、彼女の不自由な身体を守るかのように、あるいはまた、彼女の名のごとく小さくはかないものではあるが慎ましい価値観に輝くその生を保護しているかのように見えるのである。人の髪が流れに喩えられることはよくあることであるが、テムズ川に充ち溢れたような構造を持つこの物語においては、その喩えがより一層の効果を醸し出し、また逆にテムズ川の持つ意味の一面を明確にし、堅固にしていると思われるのである。

Jenny の強い信頼感を得た Lizzie は、Eugene Wrayburn という若い弁護士、そして、弟の師の Bradley Headstone との愛情のもつれから Jenny の家を去らなければならなくなり、Oxfordshire の境界地方を流れるテムズ川の河畔の製紙工場で働くことになる。そこはテムズ川という「大きな穏やかな鏡」¹¹⁾の映すものが「平和で、田園的で、美しく若々しい」¹²⁾ものだけのように思われるような田舎であり、日々の労働に感謝し、儉しく暮らしている

工員と農民の住む世界である。このような田園を流れるテムズ川はまたその本来の美しい姿を現わしているのであるが、その川の意味するところがふたつあると思われる。

... from the bridge you may see the young river, dimpled like a young child ... unpolluted by the defilements that lie in wait for it on its course, and as yet out of hearing of the deep summons of the sea.¹³⁾

So in the rosy evening, one might watch the ever-widening beauty of the landscape ... beyond the silver river ... away to where the sky appeared to meet the earth, as if there were no immensity of space between mankind and Heaven.¹⁴⁾

初めの引用文の描写は下降的な、そして、次のそれは上昇的な視点より成されている。前者に現われたテムズ川は死の海の呼び声からは遠い若い川であり、それを待ち受ける不純なものに未だ汚されていない清浄な川である。この川はその源からほど遠くない所にある生の象徴であると思われる。それに対し、後者のテムズ川は人と神とがそれ程に隔たっていないと思われる位に天と地とが融合している所まで続く美しい風景の中を流れており、一度死に到り、再び甦って神的存在へと近づいて行く生を象徴していると思われる。Lizzie について言えば、ここに到るまでに彼女は無垢な生、罪に汚された生、死、そして、再生による新しい生を経験してきたのであるから、彼女が人と神とが隔たっていないと思われるような所の近くに住むようになったことは、彼女の過去の贖罪が成就されるのが間近いことを暗示しているのである。

Lizzie の贖罪は彼女がその罪を負った過去、すなわち、溺死体から金を漁るという行為を逆転した行為によって成就されることになる。その逆転した行為とは溺死寸前の人の救出ということである。Lizzie が救出する人とは、彼女が慕っている Eugene Wrayburn のことで、この出来事はまた彼にとっても重要な意味を持っているが、そのことは後の考察でもって明らかにしたいと

思う。Lizzie を追って London からやって来た Eugene は、彼女と話し合
って分かれた後、彼を憎む Bradley Headstone に殴打されて夜の川に落ち込
んでしまうのであるが、その物音を聞きつけた Lizzie はすぐさまその場所へ
行き、川で人が流されているのを発見する。彼女はそれが Eugene であると
は気付かないが、過去の職業が役に立つ時とばかりに神に感謝する。

Now, merciful Heaven be thanked for that old time, and
grant, O Blessed Lord, that through thy wonderful workings
it may turn to good at last!¹⁵⁾

Lizzie はこのように神に感謝すると小舟を出し、全力を尽してその溺れか
けている者を救い出し、それが Eugene であることを知って驚いてしまうの
である。Lizzie の贖罪の行為がまったく無私のものである必要があるために、
初め彼女が溺死しそうになっているのが Eugene であることに気付かなか
ったことにも意味がこめられているのである。

父親 Gaffer の溺死とともに自らも精神的に死への洗礼を受けた Lizzie は、
自分が罪を負わされたテムズ川で人の命を救うことによってその贖罪を成就す
るのであるが、このことは彼女がそれまでテムズ川から離れられなかったこと
の意味を一層明確にするものである。つまり、彼女の過去であったテムズ川は
また彼女の現在であり、しかも新しい生の preserver として彼女の未来を築
く媒体となっているのである。贖罪の成就した彼女の享受する生は、過去とい
う鈍りを消し去って真の輝きを放ち、人と神との隔たりのないような世界の近
くを流れるテムズ川の河畔に住む彼女にとってふさわしいものとなったのであ
る。彼女の贖罪の成就ということは、以前にもまして彼女が新しい生を象徴す
る川を上り、神に続く道を進んだことを意味しているのである。

〔Ⅱ〕

溺死寸前のところを Lizzie に救われる Eugene Wrayburn もまたテムズ
川に密接な関係を持っている。彼は富裕な家に生まれ親の決めた職業である弁

護士となったのであるが、その仕事に励むこともなく、自主性のない生活をしている。彼は勤勉であることを嫌悪し何事にもすぐ飽きてしまう性格であり、しかも、他の人々との接触においては軽薄で乱暴なまでの態度を取るのを常としている。彼もかって自分が自我を意識していない存在であることに気づき、それを見出そうとしたことがあるのであるが結局それに失敗したのである。その失敗のため彼の言う「具現された謎」¹⁶⁾、すなわち、彼の家という dust-as-money 的価値観の世界と、そのような世界に受動的に生きる自分の真の姿を見出そうと努力したことに窺われるところの、彼が本来持っている money-as-dust 的価値観の世界との中間に置かれている彼の存在が、認識されないままに持続することとなったのである。彼の自主性のなさあるいは軽薄さもこのような彼の存在に起因していると思われる。

そのような Eugene の前に Lizzie が現われると、彼はその美しさにひかれ、彼女に関心を持ち始め、また彼女も欠点を持ってはいるが、優しさも示してくれる彼を秘かに愛し始めるのである。身分の差を意識している Lizzie の Eugene への愛が大きく育っていくのに対し、彼の彼女への関心は純粋な愛とはなり得ないままであり、彼は友人の Mortimer に彼女と結婚する意志はないと言っているありさまである。Eugene が他の人に対し純粋な愛を持つことが出来るためには、彼が自らの生の原点に立って自己の朦朧とした存在という「謎」を認識し、それを解く必要があるのである。それをするだけの力を徐々に彼に与えていくのが、Lizzie の彼に対する献身的な愛である。後に彼は述懐して、自分が彼女の「後について流れて来た」¹⁷⁾と告白しているが、この表現はその中に死の大洋へと流れ入る Lizzie の生と、そこから甦る彼女の新しい生の象徴としてのテムズ川と Eugene との関係が暗示されているという意味で重要なものである。

Lizzie の愛による Eugene の変化は、例えば、彼女と Jenny とに教育を受けさせようとする時の、彼の無私で真面目な態度に見られる。しかし、その変化の決定的なものは、London から姿を消した Lizzie が Oxfordshire の

境界地方を流れるテムズ川の河畔の製紙工場で働いていることを聞き出した Eugene が、小舟でその地方まで川をさか上り、彼女と話し合いをした後に起こるのである。彼は彼女が姿を消した理由が彼との身分的な差への気兼ねであることを知らされて、彼女の謙虚さに強く心を打たれ、またその一方、自己の存在がふたつの価値観の間という中途半端な所で動揺しているという問題を再認識するのである。その問題は、彼が自ら追い求めた Lizzie と、彼の父親が決めた富と地位のある娘のどちらを彼が選ぶかという具体的な形で現われてくる。彼のこの動揺とテムズ川とが関係づけられている。

The rippling of the river seemed to cause a correspondent stir in his uneasy reflections. He would have laid them asleep if he could, but they were in movement like the stream, and all tending one way with a strong current...¹⁸⁾

ふたつの価値観の間における彼の動揺をさらに強いものにし、彼の迷える精神を破壊するかのごとくにテムズ川のさざ波が騒ぎ、その destroyer としての一面を示すのである。しかし、彼のこの動揺による苦悩が彼の自己認識に必須のものであり、その苦悩が大きくなればなる程彼の救済が近くなるということから、テムズ川がまた彼の regenerator ともなる可能性がこの場面に暗示されていると思われるのである。ここにはまた Lizzie に導かれている彼の姿が現われている。それは彼の不安な想いが流れのようにひとつの方向に向かっていくことに窺われるのである。つまり、そのひとつの方向とは Lizzie 等の事であるとともに、川の流れが向かう死を象徴する大洋でもあるのである。彼の不安な想いが死に向かうということは、彼の心が dust-as-money 的価値観の世界で“alive”でいることよりも、その逆の価値観の世界で“dead”でいることを選ぶ方、すなわち、父親の選んだ娘よりも Lizzie を求める方に傾いて行くことを意味している。しかも今はその想いが「力強い流れ」となって死の大洋へと進んでいるのである。

彼がこのように動揺してテムズ川の河畔をさまよい歩き、彼の dust-as-

money 的価値観を映すかのように夜を映す川面を見ていると、前述したごとく、彼は嫉妬に狂った Bradley Headstone に殴打されることになる。その殴打とともに川面に映った夜は歪んでしまうのであるが、このこともまた彼を半ば抱えている食欲な何値観の破壊が接近していることを示唆していると思われるのである。川に落とされた Eugene は「流されて行って」¹⁰⁾ しまうのであるが、それは Lizzie の後について「流れて来た」彼の姿を具現したものである。そして、彼が水中で「水面に上がり、わずかにもがき、そして、本能でもあるかのように仰向けになって漂っている」¹⁰⁾ のもまた、ふたつの価値観の間、換言すれば、death-in-life と life-in-death の間で動揺し、真実を得ようと苦悩している彼の姿を具現したものであると考えられる。Lizzie によって救出された Eugene を診ている医者は彼女の献身的な態度を見て、彼女が「死者」に想いを懸けたと言っている。その「死者」という言葉の文字通りの意味は、実際に死に直面している Eugene ということなのであるが、それはまた、溺死寸前の経験をした後に、“dead” であることを選ぶことにより life-in-death を得ることが出来るであろうという彼の未来の可能性を示唆してもいるのである。

Eugene が床に伏している部屋の外で広大な大洋へと向かってテムズ川が流れているということへの言及で始まる第4書の第10章は、水に関係する言葉によって描写される Eugene のもがき、そして、彼の改心と Lizzie との結婚の約束を扱うという意味で重要な章である。床に伏す Eugene は意識と無意識の間を行き来しており、無意識の状態にある時には彼の精神は「粉碎された外形」¹¹⁾ からは消失してしまっている。彼が意識を失っている時の状態が次のように水の中でのもがきに喩えられて描写されている。

This frequent rising of a drowning man from the deep, to sink again, was dreadful to the beholders. . . . As the man rising from the deep would disappear the sooner for fighting with the water, so he in his desperate struggle went down

again.²²⁾

彼の精神が比喩的に水の中にあることは、Jenny の見る彼の表情が「水の中で作られた形」²³⁾ であるかのようだと言及されていることによっても強調されている。比喩的な彼の水の中でのものがきというものは、実際に川の中でもがいていた彼の姿と同様に、dust-as-money 的価値観と money-as-dust 的価値観、あるいは、death-in-life と life-in-death との間での彼の動揺と苦悩を象徴していると思われる。彼は溺死した Gaffer の死への洗礼を肉体が川から救われた後も精神的に経験しているのである。

Eugene の精神的経験である「深み」への下降そしてそこからの上昇の合い間に、彼は迷うことなく Lizzie に対する過去の軽薄な態度を改め、彼女に善意を示している。例えば、彼は自分を襲ったのが Bradley Headstone であると分かっているのに、Lizzie の過去を知っている Bradley がそれをあばいて彼女の古傷を再びうずかせることを気づかって、友人の Mortimer に彼が犯人であることが発覚しないようにしてくれと頼んでいる。そして、さらに彼はテムズ川に落とされる直前まで悩まされていたふたつの価値観の間での動揺に決着をつけるべく、父親の選んだ娘ではなく自らが求めた Lizzie を選ぶことを決心するのである。その決心の時点において死を覚悟していた彼が Lizzie を選んだことは、dust-as-money 的価値観に迷ったことに対する彼の償い以外の何ものをも意味しないのであり、こうして彼は過去において謎であった自らの存在を完全に認識することが出来たのである。Eugene は彼の望みを受け入れた Lizzie の献身的な看護により健康を回復し、彼女と結婚をした後、階級差別の支配する社会と積極的に対決することを決心する。ここにおいて money-as-dust 的価値観が彼等の “Mutual Friend”，すなわち、彼等の共通の信念となり、Eugene の “dead” であることにより享受される life-in-death という新しい生と、Lizzie のそれとの合流が成就されるのである。

こうして、Eugene は Lizzie の後について「流れて来た」ことにより、テムズ川での溺死寸前の肉体的な洗礼とともに精神的な死への洗礼を受け、さら

にその精神的な死より得られる新しい生を彼女との結婚でもって輝かしいものとしたのである。換言すると、彼は Lizzie に導かれて死の大洋へと入り、さらにそこから発する新しい生の川を、彼が実際に小舟でもって上流へとさか上ったように、彼女を求めて上って行き、結局彼女を得ることが出来たのである。このようにテムズ川は Eugene の動揺する精神の *destroyer* であり、また彼のその精神的な死より新しい生を導き出す *regenerator* でもあり、さらに彼の生の象徴ともなっていると考えられるのである。

〔Ⅲ〕

Lizzie と Eugene を軸とする筋とともに *Our Mutual Friend* を構成するもうひとつの筋の中の John Harmon もまた、Eugene と同様な関係をテムズ川に対して持っている。Eugene が自分の家を支配する *dust-as-money* 的価値観によって迷わせられたように、John は彼の父親である Old Harmon の残した遺産が彼の内部にもたらしたその貪欲なる価値観によって罪ある影響を受ける人物である。

John の父親の Old Harmon は、塵芥を集めそれを売ることによって巨額の富を得た人間である。彼の心は貪欲さのために自分の集めた塵芥のように腐食して、*dust-as-money* 的価値観が彼の存在全体に蔓ってしまっており、例えば、彼は自らの貪欲さでもって娘に結婚を強い、それを拒否した娘を家から追い出し、さらにその姉を弁護した14才の息子の John もまた彼女と同じ運命に処してしまふのである。14年の後、Old Harmon の死とともに一通の遺書が発見され、父親の決めた娘と結婚をすればという条件つきで John に遺産が残された時、外国で成人していた John はその遺産の知らせを聞いてイギリスへ戻ってくるのであるが、その時の彼は過去の父親の影に悩み、自分も貪欲になっているのではないかと疑いながらも、その大きな遺産に「ひきつけられている」²⁴⁾ という「迷った」²⁵⁾ 状態に陥っているのである。彼をして遺産に近づくことを恐れさせているものは、姉のための彼の父親への反抗の動因と

なっている money-as-dust 的価値観であり、逆にその遺産へと彼をひきつけているのは、彼の心の隙間に侵入した dust-as-money 的価値観である。彼もまた、Eugene と同様にふたつの価値観の間で動揺をしている人間なのである。

John をしてその動揺から脱け出させることになるのも、テムズ川での溺死寸前の経験である。彼がイギリスへの船上で出会った彼の遺産相続のことを知っている George Radfoot は、自分が John と似ていることを利用してその遺産を奪おうと計画する。John は イギリスに着くと同時に George に薬物を飲ませられ、体が麻痺しているところを George 以外の何者かにテムズ川に投げ込まれてしまうのである。ここで皮肉なことに、John の衣類を奪って身につけていた George 自身もまたその何者かに襲われ、John とともにテムズ川に投げ込まれ溺死してしまうのである。

John は後に述懐し、体が麻痺していた時には「自分」²⁶⁾ というようなものが喪失していたと言っているが、それは薬物による精神錯乱を示すのみでなく、父親の遺産に麻痺させられて dust-as-money 的価値観に陥っている、自我を喪失した彼の姿を示唆していると思われるのである。²⁷⁾ 彼は何者かにテムズ川に投げ込まれると、意識を回復する。

• • • the consciousness came upon me, "This is John Harmon drowning! John Harmon, struggle for your life. • • •" I think I cried it out aloud in a great agony • • • and it was I who was struggling there alone in the water.

'I was very weak and faint • • • and driving fast with the tide • • • The tide was running down • • •' ²⁸⁾

水の中で意識が回復し、死の苦しみの中で自らの生命のために「もがけ」と叫び、実際に唯一人もがいている John の姿は、この経験の後の彼の行動の奥に常に潜在しているものである。その行動とは、父親の遺産の持つ人間を破滅に導く力に対する抵抗であるのだが、それによって John がどのようなのか

ということは、彼が死の大洋へと向かっている潮に流されて行くことに暗示されている。つまり、彼も Eugene 同様にこの溺死寸前の経験により精神的な死への洗礼を受けて“dead”となり、life-in-death を享受できるであろうという意味がそこに含まれているのである。このようにテムズ川が、John をして貪欲なる父親の遺産に「ひきつけた」dust-as-money 的価値観に汚された精神の destroyer, さらには、その精神的な死より彼に新しい生を与える regenerator となり、また彼の生と新しい生との象徴となる可能性を持っていることがこの引用文から理解されるのである。

小舟につかまってテムズ川より脱出することの出来た John は、しばらく姿を消して、父親の選んだ娘、すなわち、Bella Wilfer がどのような人間であるか試すことを決心する。それは、悪のみをもたらす父親の財産の運命を自分が永続化するのではないかという恐怖が、John の子供時代から続いている道徳的な臆病さという琴線に強く響いているからなのである。彼はテムズ川に落とされる前にも Bella を調べてみることを計画したことはしたのであるが、その時はもしその調査から何も得るものが無ければすぐさま名乗って出ようと思っていたのであり、彼がテムズ川の洗礼を受けた後の必ず Bella の人間性を確かめようという計画の持つ執拗さはその中に窺われないのである。このような John の溺死寸前の経験の前後における同種の計画の持つ執拗さの差異は、その経験によって彼が dust-as-money 的価値観を捨て去ったことを実証するものである。このことをさらに実証するのが、George の溺死体が John と間違われた後、Old Harmon の召使いであり、John の子供時代の唯一の慰めであった Boffin 夫妻が彼の遺産を相続するという出来事である。John はこのことを知った後も自ら名乗り出て、Boffin 夫妻のつかんだ幸福を奪うようなことはせず、14年間の空白のために夫妻が John の正体に気付かないことを利用し、John Rokesmith と名を変えて彼等の書記となり、Bella を引き取った彼等により遺産が善用されるのを見守るのである。このような生活を 2～3ヶ月位過ごした後、John は自分が John Harmon であると名乗り出

る必要があるかどうかと自問するが、すでにテムズ川での経験において dust-as-money 的価値観の消失している彼にとって答は決まっており、もうしばらくの間夫妻と一緒に暮らして、彼等の回りに群がるいかさま師を処理した後に外国で元の生活に戻ろうと決心するのである。彼がこのように決心をしたのにはもうひとつの理由がある。つまり、それは John が愛し始めた Bella Wilfer が、暖かさ愛らしいところも持っているにも拘らず、dust-as-money 的価値観に迷わせられた娘であり、彼が John Harmon として名乗り出れば、金のために結婚しようと思っている彼女の欠点をさらけ出させることになるからである。

John がこのように自らの権利を主張することなく Boffin 夫妻に遺産を譲ることを決心したことは、彼の精神が“dead”であることを意味する。つまり、テムズ川に投げ込まれた彼の肉体が死を経験しなかったにも拘らず、ふたつの価値観の間で動揺している彼の精神は、彼の肉体が川から出た後もさらに川の流れとともに死の大洋へともがきつつ向かい、そこに到って再生をもたらす水の力を受け、再び新しい生の川を上ることとなったのである。John もテムズ川で溺死寸前の経験をするることによって、Eugene 同様に、精神的な死への洗礼を受けたと言えるのである。

John Harmon として Bella と結婚することを諦めた John は、一介の書記である John Rokesmith として彼女に求婚するが、食欲な価値観に目を眩ませられている彼女はそれを拒否してしまう。しかし、John の Bella に対する愛を援助する者達が現われる。それは John の姿に幼い時の面影を見出し、彼の正体を知った Boffin 夫人と Boffin 氏であり、彼等は Bella の欠点を矯正すべく芝居を始めるのである。守銭奴となった Boffin 氏の巧妙な演技²⁰⁾や、John と Boffin 夫人の忍耐強さにより Bella の dust-as-money 的価値観が消失し、John と彼女との“Mutual Friend”が money-as-dust 的価値観となるとともに、彼等は Greenwich の教会で結婚式を挙げる。John Rokesmith 夫妻は Greenwich の Blackheath に住むことになるのである。

が、彼等が London に住まずテムズ川の下流の Greenwich 地方に住んだことには Dickens によりある意味がこめられていると思われる。つまり、彼等の新しい生の遍歴が Lizzie においてそうであったように、実際に彼等の住む所に示唆されているのである。それでは新しい生を享受する彼等が Greenwich より上流にある London で経験することは何かということになる。それは John が結婚後も自分が John Harmon であることを知らせずに Bella をさらに確かめ、彼女がまったく“dead”な人間となっていることを認識した時点において、Boffin 夫妻から彼等に Old Harmon の遺産が譲渡されるという出来事である。この後、彼等は晴れて John Harmon 夫妻として London に住むのである。このようにテムズ川は死の大洋へと流れ入る John の精神的な生と、そこから発する新しい生を象徴するものであると考えられたのだが、このことは John の後をついて行った Bella にも言えることであると思われるのである。

こうして John は、Eugene と同様に、destroyer そして regenerator としてのテムズ川に dust-as-money 的価値観と money-as-dust 的価値観の間で動揺する精神を死に追いやりられ、さらにその死より精神の新しい生を受けて自らの幸福を得ることが出来たのである。John の運命とは逆に、彼の遺産を邪悪な企みでもって奪おうとした dust-as-money 的価値観に染まっている George Radfoot は、前述したごとく、自らの首を締める形で彼同様に食欲な他の者によって襲われ、溺死させられてしまうのである。このように George はこれまた自らの食欲さのために溺死した Gaffer と同じ運命を辿った人間であるが、彼等と John あるいは Eugene との相違点として考えられるのは、前者、特に Gaffer においては後者の経験したふたつの価値観の間での動揺というものが窺われないことである。Dickens は、テムズ川に入水する者の中で、食欲な価値観に影響はされていてもその自らの存在を自覚し動揺する人間には精神的な死への洗礼をもって、そして、同じ価値観に支配されているにも拘らずなんら動揺することのない人間には肉体的な死への洗礼をも

って遇しているのである。後者の場合、テムズ川は彼等の肉体の destroyer となるより他に彼等の迷える精神の destroyer となり、regenerator となることが出来ないのである。

Our Mutual Friend の中で Gaffer あるいは George と同じ運命を辿るのが、Gaffer と同じ職業に就いている Rogue Riderhood であり、自らの社会的地位のみが頭に染着している Bradley Headstone である。Rogue の食欲さは Gaffer 以上であり、例えば、彼は何らの証拠もないままに Gaffer を殺人者に仕立て上げて懸賞金を得ようとしている。また Bradley は教師としての社会的地位を誇示して Lizzie に求婚するような人間であり、彼も dust-as-money 的価値観に迷わされていると考えられるのである。Rogue は一度 Eugene や John 同様に溺死寸前の経験をしている。その際、普段は彼を嫌う人々を彼は自らの絶えだえの生でもってひきつけており、その生こそまさに彼のその経験から生じかけた新しい生であると考えられるのであるが、食欲な価値観に支配されている自らの存在を認識していない彼は、意識を取り戻すと同時にその新しい生を消し去り、再び death-in-life へと戻ったのである。彼の“alive”である精神を死に追いやるにはひとつの道しかなく、Eugene を嫉妬から襲った Bradley Headstone を強請ったために、彼は死を決意した Bradley とともにテムズ川に落ち込み溺死してしまうのである。

〔Ⅳ〕

Our Mutual Friend は Dickens の眼を通した当時の社会の反映であり、その社会は疑いもなく Oxfordshire の境界地方を流れているテムズ川の映したような美しい世界ではない。*Our Mutual Friend* の世界には、dust-as-money 的価値観に支配されたり、あるいは、その影響を部分的に蒙っている者達がひしめいており、その人々の生活は一見生氣が漲っているかに思われるのであるが、ひとたび Jenny Wren の持つような観点から見ると、それは“alive”であることにより彼等が経験している死の様相に充ちているのであ

る。しかし、そのような世界の中にも Lizzie のような “dead” であることに自らの存在の意義を見出している者もいるのである。そのような者の生活は dust-as-money 的価値観に惑わされた者には暗いもののように見えるのであるが、実はその本質において明かるく輝いているものなのである。 *Our Mutual Friend* の世界の中で、Pubsey and Co. の屋上で “Come back and be dead!”³⁰⁾ という Jenny の呼び声に逆らう者達に対して Dickens は彼等の肉体の destroyer としてのテムズ川を用意し、Gaffer, Rogue 等の溺死をもたらしたのである。しかし、その Jenny の呼び声に聞き入り、自らの状態に動揺を感じた者に対しては、Dickens は彼等の送る精神の destroyer そして regenerator としてのテムズ川を用意して、John, Eugene を救済したのである。

Gaffer, Rogue 等の溺死は、Dickens の我々に対する警鐘であり、John, Eugene の救済は我々の持つ可能性の提示である。Barbara Hardy が *Our Mutual Friend* の世界は終局的には dust-as-money 的価値観に支配された者達の残存のみがある³¹⁾ と述べているのに対して、Edgar Johnson はこの作品における Dickens の意図は単なる否定でなく、個人の持つ食欲さという欠点が克服され得るように、社会に蔓る食欲さも破壊され得るものであることを唱道しているのだ³²⁾ と主張している。私には後者の意見が Dickens の意図をよりの確に説明していると思われる。Dickens が regenerator としてのテムズ川を用意したことも、Johnson の説明する Dickens の意図と密接な関係を持っているのである。Jenny の “Come back and be dead!” という呼び声は、*Our Mutual Friend* の世界、そしてまた、現実の我々の世界において dust-as-money 的価値観に影響を受け、支配されている人間達への Dickens の精一杯の呼び声でもあるのである。

〔註〕

- 1) Charles Dickens, *Our Mutual Friend* (London, Oxford University Press, 1967) p. 281—以下 O.M.F., p. 281 と略す。

- 2) Ibid.
- 3) A. M. Patterson, "Our Mutual Friend: Dickens as the Compleat Angler", *Dickens Studies Annual*, vol. 1, ed. R. B. Partlow, Jr. (Carbondale and Edwardsville, Southern Illinois University Press, 1970) p. 252
- 4) Ivor Brown, *Dickens in His Time* (London, Thomas Nelson and Sons Ltd, 1963) p. 186
- 5) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, New Edition With Notes and an Index by A. J. Hoppé, vol. 1, p. 21
- 6) O. M. F., pp. 70—71
- 7) Ibid., p. 174
- 8) A. O. J. Cockshut は *The Imagination of Charles Dickens* (London, Collins, 1965) p. 177 で, "... the grotesqueness of the filthy Thames as a baptismal stream is very Dickensian." と言っている。
- 9) O. M. F., p. 228
- 10) Ibid., p. 439, "the golden stream"
- 11) Ibid., p. 522, "the great serene mirror of the river"
- 12) Ibid.
- 13) Ibid., p. 504
- 14) Ibid., p. 689
- 15) Ibid., p. 699
- 16) Ibid., p. 286, "an embodied conundrum"
- 17) Ibid., p. 697, "drifted after"
- 18) Ibid., p. 698
- 19) Ibid., p. 699 "drifting away"
- 20) Ibid., p. 700, "...rise to the surface, slightly struggle, and as if by instinct turn over on its back to float."
- 21) Ibid., p. 736
- 22) Ibid., p. 740
- 23) Ibid., p. 736
- 24) O. M. F., p. 366, "attracted"
- 25) Ibid., "divided"
- 26) Ibid., p. 369, "I"
- 27) H. M. Daleski も *Dickens and the Art of Analogy* (London, Faber and Faber, 1970) p. 331 でこのことを指摘している。
- 28) O. M. F., p. 370

- 29) G.K. Chesterton は *Our Mutual Friend* (London, J.M. Dent and Sons Ltd., 1966) の “Introduction” で、この Boffin 氏の墮落を Dickens は実際のものにするつもりではなかったかと推測している。
- 30) O.M.F., p.281
- 31) Barbara Hardy, *The Moral Art of Dickens* (London, The Athlone Press of the University of London, 1970) p.26
- 32) Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, vol.II, p.1045